

『露團々』における東西

平林 朋之

序

幸田露伴は昭和二十二年七月三十日に没した。現在からちょうど五十年と半年前である。露伴は戦後まで生きた作家であり、私たちの上の世代では時代を共有しているはずである。意外と近い存在なのだといっても良い。幸田文の作品にもしばしば登場して、我々にさえ親しみを感じさせる。一方、露伴の生年をみてみれば慶応三年七月二十三日とある。とすると露伴は一月五日生まれの夏目漱石と同生生まれであるわけだ。ただし、二人が活躍した時期が多少ずれているせいか、つい最近までそのことは、私の意識の内に上らなかつたと言っていた。しかし、そのことを認識してみると、同世代である漱石と露伴がそれぞれどのような文学的世界を構築しているのか考えることは非常に興味深く私には感じられるのである。幸い、私は漱石の処女作といわれる『吾輩は猫である』を卒論で取り上げ、漱石の小説家としての出発点を窺う機会に恵まれた。今回は露伴の処女作といわれる『露團々』を取り上げ、幸田露伴の出発点をみていきたいと思う。そのことで少しでも固定化した露伴のイメージ（漱石の対極にあるとするような）をくずし、漱石と同時代人としての露伴を考察するきっかけとなれればと思う。

『露團々』は雑誌「都の花」の明治二十二年二月下旬号・三月上旬号・同下旬号・四月上旬号・同下旬号・五月上旬号・六月上旬号・同下旬号・七月下旬号・八月下旬号に掲載され、翌二十三年十二月金港堂から刊行された。学海居士依田百川の序が附せられ、挿し絵は後藤魚州による。後三十五年六月博文館発行の「露伴叢書」及び旧全集（昭和五年）に所収されている。『露團々』は幸田露伴の実質的な処女作であり、当時『都の花』主筆だった山田美妙に

「イヤ実に面白い作で、真に奇想天来です。近来の大収穫です。天才てものは何時どこから現れてくるか解らん者で、まるで彗星のやうなもんですナ。」（内田魯庵「露伴の出世咄」（改造社「現代日本文学全集」月報第十一号）」

と言わしめるほど文壇を驚かしたようである。こうした同時代的見方と現在の露伴観とはどう違うのか。

近代化イコール西洋化とする風潮が支配的な時代に、それに同調しない考え方があった。東洋（日本）的なものにも価値を認め、欧北主義を相対化する行き方である。これを近代代と言う。この立場は、発想の基盤を個我におく近代人としての自覚をもちつつ時流に流されないことによつて文明批評の機能をもつた点で充分に近代的であり、前近代・非近代とは区別されるべきものである。

幸田露伴は、文学の世界でこの姿勢を際立たせ貫いた代表的な存在である。彼は西洋を

拒否したわけではないが、儒教・仏教・道教という東洋思想に拠って、西洋に拮抗しうる東洋の価値を身をもって示した。彼は表現方法として西洋流の写実主義をとらなかつた。また、彼の文学像は巨大・広範なもので、考証・論策・研究など近代が忘れたものまでも含む。そういう方法とジャンルの総体において露伴は西洋にまなぶ近代文学史とは別の道を歩んだ。（畑有三・山田有策編『日本文芸史』第五卷平成二・一／登尾豊氏執筆部分）

私は幸田露伴について、「風流仏」「五重塔」など代表的な作品を通じ、登尾豊氏が概説するような「東洋」側に身を置いた作家としてイメージしていたといい。登尾氏の言い方は慎重でありこれに異を唱えるわけではないのだが、今回取り上げる『露團々』を読み、「神秘主義」「東洋的文豪」（奥野健男「日本文学史」中公新書）といった枠内では、正確に捉えきれないのでないか、というように実に素朴な感想を抱いたのである。処女作だからどうのこうのというようなことはあまり言いたくはないのだが、『露團々』をひっそり上げて露伴が文壇に登場したというのは、意外と大きな意味があるような気がするのである。

この印象を手がかりに、『露團々』の西洋性・東洋性を明らかにし、その言述構造の特質を大まかにとらえてみたい

2 『露團々』と「醒世恒言」

この作品はアメリカを舞台としている。このことが「西洋的」な感じを受ける第一の理由であるだろう。

文章のつたなきは扱置き、趣向は中々りつとん、さつかれい何のそのとは、大きな嘘にて、実は種のある手品なり。慧眼の読者は早くも観破されつらん。

と冒頭の例言にあるように、西欧的な小説からヒントを得たようにも思われるようだ。立場を逆転すれば、作者の読者に対する戦略とも言えるわけである。しかし、これは中国の小説の趣向を借りていると言うことが、大正十五年山口剛氏によって指摘されている（大正十五年までの四十年間近くの間も明らかにされなかつたという言い方もできるが）。山口氏によれば、それは『今古奇観』中の「銭秀才錯占鳳凰儔」である。（『風流伝』改題（『明治文学名著全集第二巻』大正十五・九））「今古奇観」は明代の中国の短編小説選集であり、日本近世文学にも多くの影響を与えたとされる。長い間これは定説とされてきたが、これに対し二瓶愛蔵氏（『若き日の露伴』（S五十三・十））が露伴は選集の元本である「醒世恒言」を参照としたのではないかという説を立てている。

つまり、この作品は中国の小説を変奏し、りつとん、さつかれいと思わせるように書かれたわけである。だとすれば、これがどのように変奏されたのかを見てゆくことで、作者のアクセントをつけた問題点が自ずから明らかになるはずである。

高賛とその娘の紹介
 高賛… 西洞庭、金持ち
 娘… 秋芳（16）
 方法… 仲人の紹介・高賛の選定
 銭青と顔俊の紹介
 銭青（18）… 顔俊の家に居候、学者の家
 柄・秀才・容姿端麗
 顔俊（18）… 醜男
 尤辰の登場
 商人、高家の縁談の話話す。占い。
 顔俊と尤辰の会話、銭青を代理にたてる
 ことを画策
 高賛が顔俊を試し、その才能を認め、結婚を申し込む
 嫁迎いの儀式
 嵐で帰れなくなる。結婚式。
 秋芳との初夜
 銭青ら帰国。顔俊の疑い。喧嘩。
 県知事の裁判、銭青と秋芳の結婚。

第一回	新聞広告
ぶんせいむ…米国、ニューヨーク	
娘るびな	
第二回	セントラルパークでのうわさ話
第三回	世間の評判と新聞の論評
ぶんせいむ小伝	
第四回	しんじあ小伝としんじあの演説
第五回	しんじあとじやくそんとの会話
第六回	しんじあの思い
第七回	るびなとちえりーの会話
第八回	るびなの思いとちえりーの手紙
第九回	亢龍の紹介、亢龍と無名翁
第十回	亢龍と唐伯の会話、吟蝸子の登場
第十一回	るびなの夢
第十二回	るびなとぶんせいむの会話
第十三回	一次試験
第十四回	二次試験
第十五回	しんじあの思い
第十六回	不愉快論と三次試験
第十七・十八回	るびなとじやくそん夫婦

の画策

第十九回 しんじあとるびな恋の成就

第二十回 喧嘩。支那にて裁判

第二十一回 結末

右の表を見れば、「銭秀才錯占鳳凰儔」のおおかまな梗概がわかる。つまり高賛が婿を捜し、それに有意の顔俊が自分の身代わりに銭青という秀才を送り、そのことが露見し、身代わりだった銭青が高賛の娘秋芳と結婚するという話である。

この二つの作品から共通点を探り、「銭秀才」から『露團々』を減算すれば、『露團々』のオリジナリテイが導き出せる。

裕福な家の父親が、美しく賢い娘の婿を求める。

銭…高賛、秋芳

露…ぶんせいむ、るびな

婿の選定は父親の意志にて決められる。

うわさを聞いた醜くて才のない人物が結婚を希望する。

銭…顔俊 露…亢龍

出入りの者が、有意の人物を制止して、才のある人物を代理にたてる。

銭…尤辰・銭青 露…唐狛・吟蝸子

才のある人物が、父親に試され、氣に入られる。

才のある人物が帰国し、有意の人物に責められる。

喧嘩を調停し、才のある人物に有利な判決を出す。

裕福な家の娘が才のある人物と結婚し、幸福になる。

銭：秋芳 銭青 露：るびな しんじあ

先の表とここに示したものからわかるように、ほとんど、「銭秀才錯占鳳凰儔」に見られる事件は、『露團々』には見られるわけであり、 までは表層構造において人物関係さえ対応が見いだせるわけである。 銭と記したのは「銭秀才錯占鳳凰儔」の人物名であり、露と記したのは『露團々』の人物名である。 しかし、ここに示した共通の物語のストーリーをなす八つの要素のうち は大胆な変奏をしている。「銭秀才」のほうでは秋芳と顔俊の身代わりである銭青が結婚するのに対し、『露團々』ではるびなと結婚するのが吟蝸子ではなくて、しんじあだということとは大きな違いである。 その意味では『露團々』におけるしんじあという存在は、「銭秀才」という物語の論理を大きく逸脱していると言えるし、加えて吟蝸子の機能も異なったものと言わざるを得ないのである。 いったみれば、銭青の役割がしんじあと吟蝸子に二分化されているのである。 以上、共通の物語の要素についてである。

そして、減算の結果であるが、二つ重要な点がある。 ひとつはるびなとしんじあの関係ということになる。 「銭秀才」では秋芳からみた語りというのはほとんどない。 一部あるとすれば、初夜の晩なせ銭青が契りを交わしてくれなかつたのか、それを疑問に思う件くらいなのである。 つまり、ほとんど銭青と秋芳の関係性というのは描かれておらず、しんじあとするびなの

描写は『露團々』において特にアクセントを置かれたものだと考えられよう。もうひとつは婚姻を求むる条件の一つである「不愉快を決して抱かない」ということ。これについては『露團々』の全くのオリジナルと考えて良い。

それから、実に当たり前のことであるが、舞台がアメリカだということ、このことの意味も求めなければならぬだろう。

さて、以上「銭秀才」との比較を通し、『露團々』独自のコードともいえるものを顕在化させることができたように思う。簡単にまとめれば次のようになるだろうか。

背景としてのアメリカその対極としての支那

るびなどとしんじあの関係性

不愉快論

以下、これらのことを中心に『露團々』を考察していこう。

3 破天荒な新聞広告とその読み手

『露團々』の破天荒な構想の第一は、最初に掲げられた求婚の広告である。第一回の冒頭に芭蕉の有名な句とともに、この心知り難し、仙家の秘録か、將た禅宗の公案か とあるのは語り手が読み手の反応を先取りしているのである。

鴻沼誠二氏（『幸田露伴研究序説』平成元年・三）によれば、ぶんせいむと同趣向の新聞広

告が『東京横浜毎日新聞』に載せられたことがあつたという。つぎの引用がその全文である。

拙者儀本年十六歳に罷成る娘一人御座候處裁縫は勿論一切の女紅は中々以て巧みにして近所隣の評判も宜く御坐候且四五年前より三味線の稽古も怠り申さず只今にては可也に弾き申候得ば吉事の酒宴などには耻をかき申間敷と保証仕候尤も姿の儀は余程人並にすぐれ目はぱつちりとして鼻高からず卑くからず口元やさしく色白く加之音声は通り切たる性質に御座候然る處年令も己に十六と相成候事故一月も早く嫁入致させ申度存居候に付相應の向口相尋候得共今に見当申さず拙者及び愚妻を初め親類一同困り居候間憚りながら貴社新聞上へ御記載被下度此段雜報御担任の方々迄奉願候也

但し拙者娘と御縁組被成度御方は貴社新聞上に広告相成度左候得ば拙者より示談人指上申すべく候此亦憚ながら御記載之様奉願候

明治十四年五月十日金沢区大衆免

中村太郎左衛門

この広告が果たして実を結んだのかどうかは、調査の余地があり興味深いが、趣向上はやはり、先駆けがあつたと言うことだけを確認したい。湯沼氏は日米両国の新聞を調査したということであるから、アメリカというよりも日本における発想だったのかも知れない。

しかしながら、ぶんせいむの新聞広告はその行為自体ももちろん破天荒なのだが、後半の求婚者の資格という部分が空前絶後の騒動を引き起こす要因になるのである。つまり、第九。

特に望む所あり、即ち決して不愉快の感覚を抱かずして、常に愉快なる生活をなし得る者なることを要す。 ということ以外ほとんどの男性がクリアできる条件だったことである。 とくに猶太人 にも支那人 にもよろし、 というのは作品内世界では大きな衝撃を与えている。 猶太人 については登場しないが、 支那人 については吟蝸子がそれとして登場するわけ、 作品内ではかなり侮蔑を受けるのである。 このことについては後で又触れたい。 それでは、次にその反応を検討してみよう。

じゃ「君は何んと判定さるゝか。ぶんせいむ君といへば、誰知らぬ者もなき財差家で、其今嬢は即ちるびな嬢より外にないのですが、此のやうな廣告をして其令嬢の配偶を得むとするは、君ぶんせいむ君が發狂しての所爲でしやうか、又は小人が其の殷富を猜むのあまりにぶんせい君を疵付むと比のやうな事をしたのでしやうか。何れ此の二點より外はあるまいと考へますが、僕は昨日ぶんせいむ君及び令嬢にも面會しましたが更に何等の様子もなく、今日になつて突然此の廣告を見るといふも實に不思議で少しも解する事が出来ませんが、君は何と思ひます。」

じよ「實に御返答も出来ぬ位不思議の廣告で、……併しぶんせいむ君の發狂したといふ事はまだ聞ぬ事ですし、よしまだ發狂したとするも同氏の家には國家の良宰相ともいふべきしんぷる君といふ人が居る、……又るびな嬢もあることなれば、發狂着の意に従つて此様な廣告をなさしむる事もご坐いますまい。また鄙劣の小人の所爲とするも、當時世界に名高きぶんせいむ君に係る事ですから、新聞社でも随分疎漏の事もあるまいと考へます。」

じゃ「なる程、……それなら眞實の沙汰でしやうか。」

れお「まアさうで御坐いましやう。」

ち工「まア妾とした事が、とんだ麁相を申しました。……然しあの廣告一件、…あれはまアどうした事でござりますえ。一昨日にうよるくの御宅へ出ましたら、あなたは御不在でしたから、一寸しんぶる様に伺ひましたら、笑ひながら多分世界第一の御婿さまが来るだらうと仰やりましたが、…随分世間に廣告で縁を定める者もありますが、それは大抵中以下の人ですよ。それにまた、あの廣告のふしぎな文面、猶太人でも支邦人でも構はぬとは、あまりの事、…ぶんせいむ様の御心も豪氣過るやうですし、夫れを何ともいはぬしんぶる様の気もしれないではありませんか。」

ち工「しんぶるの心なんぞは妾なんぞに知れるものかね。」
ち工「ほんとに人の心は知れないものですよ。蛇は蜈蚣の足しらず、蜈蚣は蛇の腹しらずと申しまして、…ですから貴嬢の御父さんだつて、胸の中に何と思て入らッしやるかしれません。あまりといへば壓制な爲され方、なんだかさつぱり妾には譯が分りません。丁度熱に遇ない有感顔料のやうですわ。」
るび「妾にも御父さんの御心は分らないよ。」

ここに挙げた引用はぶんせいむの広告の非常識性を批評しているわけである。ポイントが二三あると思う。

・ぶんせいむの広告が不思議なこと

- ・ぶんせいむの心中がわからないこと
- ・ぶんせいむのやりかたの圧制な事
- ・支那人猶太人の侮蔑されていること

などがある。

4 不愉快を巡る言葉

ぶんせいむは求婚の資格として 第九。特に望む所あり、即ち決して不愉快の感覚を抱かずに、常に愉快なる生活をなし得る者なることを要す。としたことは前に述べた通りである。このことに対する反応も、様々である。

「しんじあ様の御仰やるには、『貧窮は獣を人となし、富貴は人を妖と化するといふ古言があるが、不死不老の金丹などといふ事も多くは富貴の人の描き出した想像で、不愉快の感をもたずに愉快の生活計りする者を得たいなんぞといふも、人生の欲にあき足りるより起つた迷ひだ』

しんじあは右のように不愉快をとらえる。つまり、不愉快というものは、不死不老の金丹と同じようにあり得ないものだをとらえる。また、後に不愉快の試験を突破することになる吟蝸子も同じ様な認識を抱いている。

吟「世の中に苦のない者もないに、あんな笑しな廣告、……然し虚誕とも思ひません。秦皇漢武が方薬仙人を求めたのも同じ事で、人欲は限りのない馬鹿者ですから、衣食住や財産爵位名譽等に十分になると、尚進んで長生を願つたり神通を得たがる者で、……兎角何不自由もない人が、浮世を觀じたとか無常を悟つたとかいふ向の多いのも、矢張つまる所は體を變じて來た計りの同じ慾に使はれるので、……ぶんせいむも其通りで、天女も五衰の世の中に此様な愚な考を起したのですから、是れに應じて及第する人はありはしません。」

レトリックの部分も含めてほぼしんじあの言葉と共鳴していると見て良い。つまり、元々、物語の勝者となる二人の登場人物はともにぶんせいむの出した条件を否定的に見ているわけである。ただし、しんじあはこの広告を無視し続け、吟蝸子はやむなくこの条件に自らを適合させていかなければならない立場になるわけである。そして、多くの求婚者もこの条件に挑んでいくわけである。その中で及第したのは吟蝸子ただ一人である。不愉快を打破する方法をかけたというのが第三次試験であつたが、その答えは 知らず というものであつた。その答えで及第した吟蝸子はぶんせいむの口頭試問とも言えるものにもクリアして、るびなの婚約者となる。ただし、吟蝸子が不愉快の感を抱かないものとして、ぶんせいむに認められたことは、吟蝸子が本当に愉快の士であるということではない。吟蝸子が求婚試験を受けたのは、あくまで亢龍としてである。むしろ、亢龍と吟蝸子の会話を考えれば吟蝸子是不愉快を感じていることがわかるだろう。吟蝸子は亢龍という存在を媒介にしているからこそ、辛辣なぶんせいむの言葉

にもなに食わぬ顔で対応できるし、愉快たりえたのである。ここが『露團々』のトリッキーなところである。

もう一人、かなりまとも（？）な不愉快論を展開し、ぶんせいむを感じさせたいらつくという詩人がいる。たいらつくは最終試験に欠席し、及第しないが、ぶんせいむやるびなを残念がらせている。

『眞に人の不愉快を感じずるば尤も美しき徳あるが故なり。深く恥るは、尤も美しく廉なる故なり。深く憤るは尤も美しく義あるが故なり。深く憂るは尤も美しく仁あるが故なり。』
すべて不快を感じるは尤も美しき徳あるによれり。見給へ、若し雪中に黒き兎を見れば著るしく眼に付くべし、是れ清き雪の眞白なる上に黒き者あるが爲なり。不愉快は兎の如く、美徳は雪の如し。故に愈々徳の雪の白さに従ひ、愈々不愉快の兎は著るしかるべし。されども神は美妙の装置を爲し給へり。即ち黒き兎は白き雪の深くなるに従ひて遂には白く化せらるゝことなり。噫、不愉快の兎は雪見竿なり。此の雪見竿によりて己れの徳の厚薄を考へて、成るべく厚からんとせば遂に黒き者なきに到るべし。若し此雪見竿なきならばあだむ、いぶより吾々まで、猶ほ野生の芋に満足して愉快顔なる豚なるべきに。』と筆を止めたが、どうだ。

この不愉快論は道徳性が不愉快を生むが、道徳性がさらに深化すると不愉快はなくなるといふ、多少逆説的なものである。道徳性をうたっているところは、しんじあが心の利害を考え、それに基づいて行動することで、愉快になると、説教していることと、重なる部分はある。ただし、

彼は最後の最後で試験を放り出すことになる。そのこの意味については、しんじあとるびなの関係を見ていってからふれたい。

以上のように、羅列的に見ていったのは、不愉快論というものが一つに収斂していかないからである。様々な不愉快に関する言説が飛び交い、一定の説得力を持つのだが、それでも絶対的なアクセントは語り手によって付されることはない。吟蝸子にアクセントが付されているようにも思われるが、亢龍という仮構の姿があるからこそ、ぶんせいむの試験に及第できたのであることをおもえば絶対的なアクセントではない。

5 るびなとしんじあ

アメリカという国が『露團々』の中でいかにとらえられているかは、るびなとしんじあにまつわる言説から引き出すことができる。

それは自由の国アメリカであり、個人の権利が重んぜられる国という位置づけに他なるまい。たとえばぶんせいむが夫をるびなの為に求めることは中国とアメリカでは次のように対照的にとらえられる。

「文世武女を愛して夫を撰ぶはすなわち其常理にして」（中国）

ちえりい「それに取捨の全権は余にありとありますが、お父さんが夫を御定になるのではなく貴嬢の夫を定るのですから、権利はあなたにある筈ですのに。」（アメリカ）

自由の天地の合衆国の人民の癖に憎い程強情な頑固の親父め

このことは「錢秀才」と『露團々』の物語の対照をひときわ際だたせている事項でもある。「錢秀才」では秋芳は錢青を結婚式で初めて見るのに対し、『露團々』でるびなはずでにしんじあと思ひ合っているという設定になっている。その関係性の内実はどんなものなのかを笹淵友一氏は鋭く指摘している。

愛欲、恋愛について露伴の文学に三つの思想的立場があることである。その第一は恋愛、愛欲をもつて「虚妄の現象」と見做しこれを否定しようとする悟道の立場。たとへば「封じ文」のやうな。であり、第二は好色的恋愛観である。それは或る種の情操的洗煉を伴つてはゐるが、肉欲を契機とし、肉欲的世界に繋がつてをり、多分に遊戯的であつて、精神的価値に乏しい。たとへば「辻浄瑠璃」など。第三の立場にとつては恋愛は虚妄でもなければ邪淫でもなく、又肉欲でもない。それは精神的憧憬として高い価値をもつ所謂「神聖の恋愛」である。この種の恋愛観は人間性肯定の立場において第一の「悟道」の立場と異なり、また人間性が精神的、理想的側面において捉へられてゐるといふ意味で第二の好色約恋愛観ともちがつてゐる。ところで近代文学におけるこの種の恋愛観の根柢は日本文学の伝統の中には見出しえないものであり、いふまでもなく、それはキリスト教の影

響を受けた西欧的理想主義、理想主義的ヒューマニズムの系統に属するものである。このやうな恋愛観の典型的な姿をわれわれは「露團々」「風流悟」等の作品に見出すであらう。

『浪漫主義文学の誕生』（昭和三十三年一月）

つまり笹淵氏は『露團々』のるびなとしんじあの関係に、西欧的な「神聖の恋愛」を見ているのである。それについては私も同感であり、異論はない。

不愉快をめぐる言葉は、先ほど見たように、非常に複雑で、様々であることがわかるのであるが、恋愛に関する言葉はある一点をのぞいて、非常に単純であると言つていい。

しん「妾は尤も深く妾を愛する人を愛すること尤も深く、尤も堅く妾を信ずる人を信ずること尤も堅し。恐くは人もまた然らん。されば一人深き愛と堅き信をなせる時は、既に二人は一體となりしものなりといふ事を疑はず。

しんじあとするびなはその困難をもとせせず、信と愛により、その愛を成就したと見て良い。そして、最後に語り手は 人の世は誠こそ尊けれ としんじあとするびなの誠実なことをたたえるのである。だが、その言葉がどうも私には説得力に欠けるように思われるのである。それは少々不気味とも言えるたいらつくの存在があるからではないか。

たいらつくはぶんせいむの試験を通じて最もぶんせいむに期待された人物である。るびなでさえもたいらつくの詩を聞いて なる程是が一番 と言い、しんぶるや、詩人は来ないのか え といひ、たいらつくが求婚を辞退したときには 限りない恨み といつていくくらいであ

る。つまり、作品内世界でたいらつくはアクセントのついた存在であると言うことは間違いないのである。
にもかかわらず、たいらつくは求婚を辞退したのである。そこが私にはどうも釈然としないが、この物語ではそれなりの必然性があるようにも感じられるのである。

可憐の少女は麗はしき天上の三日月をとりて髪を飾るの櫛となさんと欲すれども、風流の韵士は誰れか園中の薔薇を折て瓶に挿むの花となすを願はんや。

白薔薇、

曉天の空にきらめく星の影の落て氷しか、

冷風に香を吐く、

さては白薔薇一輪咲きしな。

さもあらばあれ、

色は眼に、香は袖に深くも染てあるものを、

何とて人の心なく折らんとするぞ、

心なや。

『露團々』中にはいくつもの詩歌があり、それらは現在『露伴全集』十三巻に「露團々の歌」として抜粋されている。ここに引用したたいらつくの書簡もその中の一つとして抜粋されている。この詩の意味するところは前半の部分に述べられていよう。（「愛らしい少女は美しい空

の三日月をとつて髪を飾る櫛にしようと思ふけれども、風流の雅士は誰が庭の薔薇をおつて、花瓶に挿す花にしようと思ふだろうか。」ここで詠われている白薔薇というのはもちろんるびな嬢のことであろう。つまりこの詩は、るびなを手に入れたと思ふすべての人に対する、揶揄的な言辭であるとも読めてしまうのである。それこそが風流の立場であるとたいらつくはするのだ。

岡崎義恵氏（『日本芸術思潮 第二巻の下』昭和二十三・六）は『露團々』の主題的なものとして「風流思想」を認めている。風流と言う言葉は、無名翁の占いで「風流閑蒿人」とでてきたように、吟蝸子に多く使われている言葉である。るびなが最後に

一方に於ては才に任せて楽みを取り、氣を抑へて巧に趣きをなすの奇人を實に計畫なさの計畫に知り得たるなり。然のみならず、余は是を推しひろめて従來尊むにたらずとせし宗教の價値を知り、又た解する事なかりし風流の趣意を知るの幸福を得たり。

といつているのを考えれば、不愉快を感じない人というのは風流人探しと言つても良いように思われるのだ。それだけにたいらつくがここで 風流の韻士 を自認しているのは、少なからず意味があるように思われるのである。

吟蝸子は風流の士として描かれているものの、実際にはトリッキーなところがあるのは先程述べたとおりである。つまり、るびなにいろいろ試されても、るびなと吟蝸子の間には穴龍という間接的なものがある。つまり、るびなと一定の距離をとっているからこそ、超然としていられるというからくりも否定できないと言つことである。それに比べるとたいらつくは自

ら、るびなに距離をとったと言うことができよう。(話が飛ぶように感じられるかも知れないが漱石の『草枕』では画工が非人情の美学を展開する。それは現実のものを画中のもののようにみること、美を余念無く認識するということであつた。それと何となく、呼応するような気もするので特にここに記したい。)

このたいらつくの言説は直接的にはしんじあを相対化しているとみることができ。しんじあはるびなを手に入れた。そのことはたいらつくの回答にあつたような、悲しい運命をもまたひきおこす可能性をも手に入れたと言うことであろうか。またぶんせいむが最終的にしんじあを受け入れたとしても

世の中の夫婦の姻縁を定る者を見るに、多は容貌とか氣質とか財産才學とかの有無美醜を標準として互に擇ぶが、是は唯だわれの嗜好尚を満足させるのを目的としてするのだから、やゝもすれば嗜好尚に満足を得ざるのみならず、他の點で大に不満足の事を見出し、遂に不幸の生活に五十年を終る

といつてゐるのも強烈な反措定になつてゐることは、変わらぬのではないか。ただし、これを主題の不徹底と見るよりも、異なる声の闘争と位置づけた方が適切である。

先にも述べているが、この作品内で 支那 は相当侮蔑的に描かれている。

同氏は眞に此の方法の選擇によりて其の佳婿を得る覚悟なる乎、又今嬢は果して無教育、無財産、無宗教、醜貌鄙性の支那人、著しくは猶太人をも其の配偶とするを恐れず

元來鼠の肉を食ふ人種はむろん及第するはずがないのです

このような例を挙げれば限りはないが、なぜ 支那 はこのようにおとしめられねばならないのであろうか。

一つ言えることは、発表の時代背景にあると言える。1842年のアヘン戦争以後、清朝は次第に欧米諸国に半植民地化され、力を落としていく。そして1894年（明治二十七年）の日清戦争にて完全にその権威を失うことになるのである。こうした時代背景を考えれば、欧米の諸国、それに習おうとする日本が 支那 を蔑視しても驚くには当たらないのである。

『露團々』において、支那 を代表するものに、無名翁の占いがあるであろう。亢龍はこの占いによつて、るびなを得ると思ひこみ、吟蝸子を身代わりにさせたのであるが、吟蝸子に『方陣秘説』という書物で、その占術のナンセンスなことを説き、亢龍も 温順な人となり、父の官を継ぎて栄えしとなり という件がある。この『方陣秘説』という書物は、実は露伴の死後発見され、昭和二十五年に塩谷贇氏によつて紹介され、現在全集の第四十巻に収録されている。執筆年代は実は定かではないのだが、数学史の方面からも研究が進んでおり、明治二十六年の『小国民』に連載された『方陣秘説』（筆者不明）が幸田露伴の『方陣秘説』のダイジ

エストであることまで明らかにされている（高木茂男「幸田露伴の『方陣秘説』」(「数学史研究」昭和五十・一)）。ダイジェストというのは方陣の説明の部分を挟む、いわば思想的部分はカットされているということである。とすれば、『方陣秘説』は小国民のために書かれたわけではなく、柳田泉氏(『幸田露伴』(S十七・二))の言うように『露團々』の成立以前に書かれた可能性も非常に強いというわけである。

『方陣秘説』はお読みの通り、支那の洛書を妄説として批判し、

二十世紀ノ新天地ニ入ラントスル世界ノ氣運ニ當リナガラ、尚ホ依然トシテ東洋ノ腐散空氣ノ中ニ呻吟シテ、神怪ト想像ノ念慮ノミヲ運用シテ徒ラニ玄ヲ語り理ヲ談ジ傲然トシテ得意ナル人多クアルハ、憫ムベク歎ズベシ。噫、余ハ神怪ヲ好ミ想像ヲ喜ブ事ヲ責メズ、唯々之レニ甘ンジテ其歩ヲ進メズ百尺竿頭一躍ノ勇氣ナキヲ責メザルアタハズ。今此ノ方陣ノ事素ヨリ取ルニモ足ラザル一小奇巧ノ術タルニ過ギザレドモ、是ヨリシテ人或ハ一隻眼ヲ開テ新知識ト新學説ヲ得ルニ至ラバ、余ノ満足喜悅スベキノ事ト感ズルヤ小少ニアラズシテ、讀者ノ利益モ亦タ少ナカラザルベシ。(洛書ヲ取ルニ足ラズトスル文ニテモ)

と言うように、東洋の迷妄を破り科学的な知識や学説を得ることを進め、孔子なども厳しく批判しているのである。ただし、余りにトーンが高く、それをもって、すべてを露伴の肉声だとして受け取ることのできないような感じも受けるのである。晩年の露伴の文章を引用するのは気が引けるが、次のようなものが私の眼に触れたので一応紹介しておく。

論語 悦楽忠恕 序

論語は孔夫子の語を録し、兼て其弟子の語に及べるの書にして、尊ぶべく信ずべし。聖人の訓、平正温厚、直ちに大道を演べ、人の肺腑に入る、一毫の危秘幽渺のところ有る無し。故に古今を通じ賢愚を併せて、これを解し難しとする者無く、百草萬木、皆太陽の光明を仰ぎて以て徳恵に浴するが如く、その恩に感じ教を承くるを得。

(昭和二十二年四月 中央公論社)

これを露伴の変心ととるかどうかはさらに研究の余地がある。ここでは『露團々』の支那に対するトーンと一脈通じるものがあるので、『方陣秘説』は『露團々』のサブテクストとして読んだ方が無難であるように思われるのである。

だが、『露團々』において 支那 は徹頭徹尾けなされているわけではない。第二十一回における、知縣の裁判に寄せられた語り手の言葉を思い出していたきたい。

それにしてもこの知縣能く情を察し理を弁じけるぞ、流石に中華の人なりける。

というように、ここでは中国人というのが非常によいイメージで語られているのである。また、「銭秀才」で顔俊は大変な恥をかいて、幾月も外にでられなかったとあるが、『露團々』の亢龍は『方陣秘説』を読み恥じ悟って、その後は栄えたというのだから、中国人である亢龍も救われてはいるのである。そこにまた、あるテーマをを固定化して語らない、この作品の特質を見ることが出来る。

7 小説 的対話性

ここまで、『露團々』を様々な諸相において、読んできたが、『露團々』から一つの主題を命題風に抽出して行くことは、きわめて困難であると言うことがわかる。

このことを『風流伝』などと比較して、完成度が低いといってしまうのは簡単であるが、あの時期からの露伴が主情的なものを潜めたのと考えあわせれば、出発点である『露團々』が強烈な思想を展開するよりも、様々な声をクロスさせていき、一つの物語を織り上げる方向に向かっているのは、あなたがち未完成なだけではないという気ずらすのである。それは、『方陣秘説』に見られるような科学を指向する精神とも決して無関係ではないはずである。

恋愛観しかり、不愉快論もさることながら、つねにある人物が他の人物に相対化されてゆく。たとえば恋の勝利者かに見えるしんじあも、たいらつくによつて相対化されて居るとも考えられるし、またしんじあの宗教的潔癖性というようなものだけでは、るびなと結ばれる訳にはいかなかったはずで、じゃくその優れた現実感覚があればこそ、るびなとしんじあは結ばれたのだといえるのである。それらの声を聞わらせる装置こそが、ぶんせいむの新聞広告であつたわけだ。

ぶんせいむの新聞広告を冒頭に持つてきたと言ふことは、『露團々』の言述構造を決定していると言ふことが言える。現実の読者も語り手も、作中人物も原理的には同時にストレートに第一回の新聞広告という情報が与えられることになるのだ。であるから、ぶんせいむの新聞広

告に対する位置は皆平等であり、それを論評、批評する読み手のネットワークの中で事件やらなにやらが進行していくのである。そのネットワークを具体化したのが、第二回のじょんやれおなあどの会話であり、じゃくそん夫婦の会話であり、亢龍や唐伯、吟蝸子の会話なのである。特に第二回の会話などは読者と同じようにニユートラルと言える噂で面白い。また、るびなやしんじあでさえもこのネットワークの中に組み込まれているのである。語り手はこのネットワークの線上を巧みに動き、焦点化していくことで物語を織り上げていくのである。

バフチンは小説をイデオロギー的闘争の場としたが、『露團々』も風流（不愉快）、常識、宗教、愛をめぐって、かなりの闘争があったと言えるのではないか。今回は時間の関係上ふれられなかったが、文体上も和文体、漢文体、翻訳体かなりの混交があり、それぞれの魅力が拮抗しているのである。たとえば、最初のれおなるとじょんの会話や、じゃくそん夫婦の会話などは、どこか落語的な要素を秘めているし、るびなやしんじあの独白はいかにも西洋的な清新なイメージをもたらすのである。また、古今東西の言葉やものをあつめてペダンティックなことは、おそらく近代文学中屈指であり、膨大な引用も又、イデオロギーを画一化させないことに一役買っていると思われる。つまり、この作品の言葉は常に恐ろしく広大な外部のテクストとつながっているのだ。

とにかく、『露團々』において、露伴は必ずしも東洋的とはいえない位相にたち、『方陣秘説』に象徴的なように、西洋のマジックスクウエアを日本に紹介するほど（原典は前記高木氏によればイギリスの科学雑誌「Knowledge」1881年12月号）、科学的な指向をも示していた。また、しんじあとるびなの愛は「プラトニック・ラブ」を基本とする、紛れもない聖愛としての「恋愛」であり、西欧的なものと言わざるを得ないのである。西洋と東洋の往還

こそ『露團々』の中に際だつものだというこゝともできるのである。

(一九九八年一月)